

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして¹名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、²詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。このころからその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊類の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために、ついに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、Iとして齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の僞才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。⁴彼は快々として樂しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿ったとき、⁵ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何かわけの分からぬことを叫びつつそのままにとび下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻つてこなかった。付近の山野を搜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁倬という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、途に商於の地に宿った。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、馭吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いまし少し待たれたがよろしいでしょうと。袁倬は、しかし、供回りの多勢なのを待み、馭吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つたとき、果たして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁倬に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつつやくのが聞こえた。その声に袁倬は聞き覚えがあつた。驚懼のうちにも、彼はとっさに思いあつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁倬は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとっては、最も親しい友であつた。温和な袁倬の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。

叢の中からは、⁸しばらく返事がなかつた。しのび泣きかと思われるかすかな声の時々漏れるばかりである。⁹ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁倬は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分はいまや¹⁰異類の身となつている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まつているからだ。しかし、今、凶らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、¹¹かつて君の友李徴であつたこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

汝水のほとりて iv。闇の中へ駆け出し、二度と戻ってこなかった。

答 i 進士 ii 詩家 iii 自尊 iv 発狂

問 傍線部5とあるが、それはなぜか。適当でないものを、次から二つ選べ。 思

ア 妻子の生活のために詩業を断念したことをずっと後悔し続けていたから。

イ 文名が容易に揚がらないために焦燥感に駆られ追い詰められていたから。

ウ 再び官吏になったものの自分の能力に見合う官職が得られなかったから。

エ かつての同輩よりはるかに低い官位に甘んじることができなかったから。

オ 生活が苦しく、食事を満足にとれないことに耐えられなくなったから。

問 傍線部6とあるが、何が「あぶないところだった」のか。 思

答 虎としての李徴が袁修に襲いかかり、今にも食い殺そうとしたこと。

★問 袁修はどのような性格の人物だと考えられるか。三十字以内で答えよ。 思

答 友人の少なかった李徴とも親しくなれる温和な性格。(24字)

★問 傍線部7の言葉から、袁修のどのような性格がうかがえるか。 思

答 いまだに李徴を友人として見ている袁修の優しい性格。

問 傍線部8とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 自分よりもはるかに文才に富む袁修に対しては、常に劣等感をいだいており、言葉を交わしたくなかったから。

イ 袁修が中央官庁から自分を搜索に派遣されたことを察知し、出頭すべきか否か、大きな迷いがあったから。

ウ かつて親しかった袁修に対して懐かしきもあるが、今の姿が恥ずかしく、どう対処すべきかわからなかったから。

エ 監察御史にまで出世した袁修がねたましくとましく、「我が友」と声を掛けてきたことが不愉快だったから。

オ 最も親しい友人であった袁修を襲おうとしたことが情けなく、合わせる顔がなかったから。

答 ウ

問 傍線部9とあるが、この時の李徴の心情はどのようなものだと考えられるか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 自分が虎であると知られてしまったため、どうやって襲うべきかを考えている。

イ 久しぶりに親友に会い、何を話したらよいかわからず姿を現すことを逡巡している。

ウ 虎となった自分を恥じる一方で、友人と話したいという願いもあり、迷っている。

工 思いがけず友に会えた幸運に感謝し、喜びに満ちあふれた昔の日々を思い出ししている。
才 虎である自分を探しにきた友人を目にし、この場をどう逃げきるかを模索している。

【答】ウ

問 傍線部10とは、李徴が何の身であることを言ったものか。【思】

【答】虎

問 傍線部10とあるが、李徴は「異類の身」である今の自分の姿をどのように思っているか。それを表現した語句を本文中から二つ探し、六字と七字で抜き出せ。【思】

【答】あさましい姿・醜悪な今の外形

問 傍線部11とあるが、かつて李徴にとって袁愔はどのような「友」であったか。次の空欄にあてはまるように、本文中から、空欄ⅰは二字、空欄ⅱは六字でそれぞれ抜き出せ。【思】

ⅰに進士になり、李徴にとっては

ⅱであった。

【答】ⅰ 同年 ⅱ 最も親しい友

問 傍線部12とあるが、この一文は、本文中でどのような効果を上げているか。【思】

【答】怪異を素直に受け止める点から、狷介な李徴と友人になれるという懐の深さを持つ温和な袁愔の性格を補強するとともに、人間が虎になるという常識では考えられないことに対して読者の抵抗感を少なくする効果。

問 傍線部13とは、どういうことか。【思】

【答】目の前にいるが、姿を見せようとしない李徴の声だけを聞きながら語り合ったということ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行くうちに、いつしか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か身体じゅうに力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気がつくとき、手先や腕のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映してみると、既に虎となつていた。自分は初め目を信じなかった。次に、「これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと思わねばならなかったとき、自分は茫然とした。そうして懼れた。まったく、どんなことでも起こり得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになつたのだらう。分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。²理由も分からずに押しつけられたものをおとなく受け取つて、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。自分はすぐに死を想うた。しかし、そのとき、目の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見たとき、³自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚ましたとき、自分の口は兎の血にまみれ、あたりに兎の毛が散らばつていた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、⁴それはどうして語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還つてくる。そういうときには、かつての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることもできる。その⁵人間の心で、虎としての己の残酷な行いのもとを見己の運命を振り返るときが、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従つて短くなっていく。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気がついてみたら、⁶おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。⁷これは恐ろしいことだ。いま少したてば、おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまつた。ちやうど、⁸古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいにおれは自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように途で君と出会つても故人と認めることなく、君を裂き食らうて何の悔いも感じないだらう。いったい、獣でも人間でも、もとは何かほかのものだったんだらう。初めはそれを覚えていたが、しだいに忘れてしまひ、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？ いや、そんなことはどうでもいい。おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそろく、そのほうが、おれはしあわせになれるだらう。だのに、おれの中の人間は、そのことを、このうへなく恐ろしく感じているのだ。ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思つていよう！ おれが人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分らない。誰にも分らない。おれと同じ身の上になつた者でなければ。ところで、¹⁰おれがすっかり人間でなくなつてしまふ前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁修はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入つていた。声は続けて言う。

ほかでもない。¹¹自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至つた。かつて作るどころの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在もはや分からなくなつていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦せるものが数十ある。¹²これを我がために伝録

問 傍線部 2 からは、李徴のどのような心情がうかがえるか。思

答 虎になるという不条理な運命を無理にでも納得しようとする心情。

問 傍線部 3 とあるが、「人間」に傍点がついているのはなぜか。四十字以内で説明せよ。思

答 人間と獣の性質を併せ持つ自分の中にある人間性の意味であることを強調するため。(38 字)

問 傍線部 4 とあるが、それはなぜか。思

答 人間の気持ちで、獣である己の所行を振り返って見た時、それがあまりに非道で残忍だから。

問 傍線部 5 のように感じている李徴が、自分の運命を受け入れようとして自身に言い聞かせている箇所がある。その箇所を本文中から一文で抜き出し、最初の五字を答えよ。思

答 理由も分か

問 傍線部 5 とあるが、李徴は何を「恐ろしく」感じているのか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 自分自身が人間の理性をもちや完全になくして、虎の本能だけに支配されてしまっていること。

イ 自分自身の存在が、人間の理性ではなくて虎の本能に支配されつつあるのをとめられないこと。

ウ 自分自身が理由も分からずに生きていかざるを得ない生きもののさだめから逃れられないこと。

エ 自分自身が残酷な行いを反省し、その運命を振り返るべき時間が日に日に短くなっていくこと。

オ 自分自身が人間を食べることでしか生きていけなくなったと何度も思い知らされること。

答 イ

問 傍線部 6 とあるが、李徴の一人称が「自分」から「おれ」という表現に変わったのはなぜか。思

答 感情的に高ぶってきたから。

問 傍線部 7 とあるが、何が「恐ろしい」のか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 他の生き物を殺すことに罪悪感を持っていたのに、仕方がないと思いはじめたこと。

イ 自分が人間であることではなく、虎であることを前提として考えるようになったこと。

ウ 人間としての心が還ってくる数時間が、日を経るに従って短くなってきたこと。

エ 自分が虎となったことを怪しんでいたのに、運命だと割り切るようになったこと。

オ 以前は全く見当もつかなかった、自分が人間から虎に変わった原因が分かってきたこと。

答 イ

問 傍線部 8 とあるが、「古い宮殿の礎」「土砂」にたとえられているものを、それぞれ本文中から抜き出せ。思

問 傍線部9に「おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

- ア 人間としての自分の過去を忘れ果てれば、過去の所業への未練も後悔もすべて断ち切ることができるから。
- イ 人間の心で虎としての己の残酷な行いのあとを見て、己の運命を振り返る恐怖から速やかに解放されるから。
- ウ 人間も獣も初めから今の形のものだったと思ひ込むのは間違ではないかという難問に悩む必要がなくなるから。
- エ 人間に還る数時間に、どうして自分が虎になってしまったのかをあれこれ考えてしまう苦しみから逃れられるから。
- オ 場合によっては人間に戻ることができるかもしれないという、叶うはずのない希望を捨てることができるから。

問 傍線部9からは、李徴のどのような心情がうかがえるか。思

答 人間性を失って完全に虎になってしまった方が、罪悪感に苦しめられることもなく気持ち楽になるとは思うが、人間性を喪失してしまうことに恐怖もいだいている。

問 傍線部9に「そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ」とあるが、このとき李徴は何がなくなること「恐ろしく感じている」のか。本文中の表現を用いて答えよ。思

答 自分の中の人間の心。

問 傍線部9に「このうえなく恐ろしく感じているのだ」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

- ア 虎になってしまうと、自分の詩を世間に発表することができないから。
- イ 自分の人間を襲うという残酷な行為に対して、失望しているから。
- ウ 虎になりきってしまうことで、人間性を失ってしまうから。
- エ 虎に完全になりきってしまえば、友人までも襲ってしまいそうだから。
- オ わずかばかりある元の姿に戻る可能性を、失ってしまうことになるから。

問 傍線部10とあるが、李徴の「一つ頼んでおきたいこと」とは何か。思

答 李徴が作った詩のうち、今でも覚えているものを伝録してほしい、ということ。

問 傍線部11とあるが、李徴の「詩人」としての思いが端的に述べられている一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。思

答 作の巧拙は

問 傍線部11における「業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った」の「業」「運命」とは何か。それぞれ十字程度で答えよ。思

答 「業」…詩人として名を残すこと。(12字)・「運命」…虎となってしまったこと。(12字)

問 傍線部12からは、李徴のどのような心情がうかがえるか。思

答 自分の詩を人々の記憶の中に何としても残したいという悲痛な執念。

問 傍線部13とあるが、李徴の「旧詩」を聞いて、袁俊が感じたことを次のようにまとめた。空欄にあてはまる表現を、本文中から、空欄iは四字、空欄iiは二字、空欄iiiは六字で、それぞれ抜き出せ。思

作者の i を思わせると ii する一方、iii としてはどこか欠けるところがある、と感じていた。

答 i 才の非凡 ii 感嘆 iii 第一流の作品

問 傍線部13とあるが、「吐き終わった」という表現は、どのような効果を上げているか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 長年温めてきた詩を一気に朗詠し終えた李徴の達成感を読者に伝える効果。

イ 詩人としての才能が戻りつつあり、自信を取り戻している李徴の姿を伝える効果。

ウ 虎の身となった李徴に必要なものを異物として排泄している印象を与える効果。

エ 虎でありながら、人間の言語能力を完全に保持できている李徴の能力を示す効果。

オ 詩情が自然とあふれ出てきて、芸術的な感性を高ぶらせている李徴の様子を伝える効果。

答 ウ

問 傍線部14とあるが、「李徴の声」が「突然調子を変え」たのはなぜか。思

答 詩人になったつもりで熱心に自作を朗詠していたが、虎になった我が身のことを振り返って生来の自嘲癖が顔を出したから。

問 傍線部15とは、具体的にはどのような様子を指しているか。思

答 自分の詩集が長安の都の詩を解する知識人たちに読まれている様子。

問 李徴による即席の詩の形式を答えよ。知

答 七言律詩

問 李徴による即席の詩で、韻を踏んでいる漢字を三つ答えよ。知

答 高・豪・皞

問 空欄Iに入る漢字として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 避 イ 治 ウ 癒 エ 逃 オ 闘

答 エ

問 李徴による即席の詩の解釈として適当でないものを、次から一つ選べ。思

ア 思いがけなく狂気にとりつかれて私は獣になってしまった。そして、災いが重なりこの運命はどうにもならない。

イ 虎となった今日、私の鋭い爪や牙に歯向かう者は誰もいない。自分自身を憎み蔑むこの私自身を除いては。

ウ かつての私はあなたとともに世間の評判は高かった。

エ 今や私は獣となり草むらに隠れている。一方で、あなたはすでに出世して立派な車に乗り、氣勢が盛んである。

オ 溪谷や山間を照らす明月に向かって、今の悲しい思いを長く吟じようとしても、ただ獣の短い咆哮にしかならない。

問 李徴による即席の詩の中から、「虎」を意味している表現をすべて抜き出せ。思

答 殊類・異物

問 傍線部16からは、人々のどのような心情がうかがえるか。思

答 李徴の身の上起きた不可思議な出来事について疑うことを忘れ、不幸な運命を背負うことになった李徴の気持ちに同情して、深く悲しんでいる。

問 傍線部17とあるが、「李徴の声」という表現になっっているのはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 他の者からは姿が見えない場所で李徴が語っているから。

イ 遠くの者にまで聞こえるほど李徴の声が大きいから。

ウ 李徴の姿が人外のものに変身してしまっているから。

エ 李徴の声は美しく人々の心に訴えかけるものであるから。

オ 李徴の声が哀慘と親しくしていた頃と変わっているから。

答 ア

答 イ

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であったとき、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでも言うべきものであった。おれは詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって、切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。

I

II

に、碌々として瓦に伍することもできなかった。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつてますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。⁴人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。⁵これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、まったく、おれは、おれの持つていたわずかばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかもしれないと卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とがおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎と成り果てた今、おれはようやく。おれに気がついた。それを思うと、おれは今も胸を灼かれるような悔いを感じる。おれにはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、おれが頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろ、どういふ手段で発表できよう。まして、おれの頭は日ごと虎に近づいていく。どうすればいいのだ。⁷おれの空費された過去は？ おれはたまたまなくなる。⁹そういうとき、おれは、向こうの山の頂の巖に上り、空谷に向かつて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。おれは昨夕も、あそこで月に向かつて咆えた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嗅いても、誰一人おれの気持ち分かってくれる者はない。ちやうど、人間だったころ、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。おれの毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の音を伝って、どこからか、暁角が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。¹⁰酔わねばならぬときが、(虎に還らねばならぬときが)近づいたから、と、李徴の声があった。だが、¹¹お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはいまだ號略にいる。もとより、おれの運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、おれは既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。¹²決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らっていただけられるならば、自分にとって、恩倖、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から慟哭の音が聞こえた。哀もまた涙を浮かべ、喜んで李徴の意に添いたい旨を答えた。¹³李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な

調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ、¹⁴おれが人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を随すのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁倅が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないでほしい、そのときには自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけて。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちに君に起こさせないためであると。

袁倅は叢に向かって、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがごとき悲泣の音が漏れた。袁倅も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上についてたとき、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に¹⁵白く光を失った月を仰いで、一二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、¹⁶再びその姿を見なかった。

問 傍線部1とほぼ同じ意味を表す部分を、本文中から十字程度で抜き出せ。思

答 刻苦して磨こうともせず(11字)

問 傍線部2とあるが、「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」とは、李徴のどのような心理か。それぞれ五十文字以内で答えよ。思

答 「臆病な自尊心」…自分の内面や実力を他人に示すことによって、自己評価よりも低い評価を受けることを恐れる心理。(45字)・「尊大な羞恥心」…恥をかくことを恐れ、わざと尊大な態度をとることによって他人と交わることを避けようとする心理。(46字)

問 空欄Ⅰ・Ⅱに入る語句として最も適当なものを、それぞれ次から選べ。思

- ア 己の珠にあらざることを惧れる
- イ 己の珠ならんとひたむきに願う
- ウ 己の珠を既に得たりと思う
- エ 己の珠なるべきを半ば信ずる
- オ 己の珠をいまだ知らずにいる

答 Ⅰア Ⅱエ

問 傍線部3とあるが、「瓦」と同じ意味で用いられている二字の熟語と、反対の意味で用いられている二字の熟語を、本文中からそれぞれ抜き出せ。思

答 同じ意味…俗物・反対の意味…鬼才

問 傍線部3とは、具体的にはどういうことか。二十五字以内で答えよ。思

問 傍線部4の「人間は誰でも猛獣使いであり」とは、人間のどのような方を行っているのか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 人間は自分にも理解できない激しい感情をいだくことがある、それを周囲の協力によって制御している。

イ 人間は誰しも心の中に制御すべき欲望を持っており、それは自らを破滅に導く可能性がある。

ウ 人間は運命が不可避のものだと強く思い込むことがあるが、それを理性によって制御している。

エ 人間は周囲よりも自分が劣っていると意識してしまうことがあるが、それを乗り越えながら生きている。

オ 人間は自分が一番優れていると思う傾向にあるが、それを理性で制御して表に出さないようにしている。

答 イ

問 傍線部4とあるが、この箇所の解釈として適当でないものを、次から一つ選べ。思

ア 人間は誰でも、自負心や虚栄心や利己心という猛獣を持っていて、これをよく制御しないと、身の破滅に陥る。

イ 人間は誰でも、猛獣のような荒々しい気質を有しており、これを人間的な理性によって制御しなければならない。

ウ 人間は誰でも、自己狂疾の原因、すなわち、猛獣を内在具備しているため、これを巧みに操作する必要がある。

エ 人間は誰でも、激烈な社会変動という猛獣のもと、価値観の変化にともなう道徳規範を模索している。

オ 人間は誰でも、欲望という自然の性向を持つために、これを社会規範に基づき抑制して希薄にする必要がある。

答 エ

問 傍線部5とあるが、このとき李徴は自分を虎に変えたものは何だと考えているか。本文中から二つ、それぞれ六字で抜き出せ。思

答 臆病な自尊心・尊大な羞恥心

問 傍線部6は何を指すか。本文中から一文で抜き出し、最初の五字を答えよ。思

答 人生は何事

問 傍線部7とは、具体的にはどのような過去か。思

答 「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」という自己の性情のために、才能を専一に磨かず、わずかばかりの才能を空費してしまった過去。

問 傍線部7とあるが、李徴は過去において何を空費したと述べているか。本文中から二字で抜き出せ。思

答 才能

問 傍線部8の表現についての説明として適当なものを、次から一つ選べ。思

ア 自分の今の苦境の中で、虎になったという現実を受け入れざるを得ない李徴の悲劇を印象づけている。

イ 自身の悲劇に向かい合うことができず、わけも分からずにもがき苦しみ、悲嘆に暮れる李徴の姿を表している。

ウ 詩の世界を極めようとして夢を果たせなかった李徴の心が、「山の頂」で「空谷」に向かつて吼える姿に示されている。
エ 獣たちや樹々に自分の苦しみを分かかってほしいと思う一方で、その気弱さを見抜かれることへの恐れが表現されている。
オ 百獣の王たる自分の力を誇示しようとして吼える姿には、生き物に自分への畏怖の念をいだかせたいという思いが表れている。

★問 傍線部9とは、どういうことか。思

答 ア・ウ

★問 傍線部9とあるが、「夜露」以外で濡れた理由を漢字一字で答えよ。思

答 悲しみの涙で濡れたということ。

問 傍線部10とあるが、虎に還ることを酔うことにたとえたのは、どのようなことを意味しているか。三十文字以内で説明せよ。思

答 涙

問 傍線部11とあるが、詩の伝録より後にこれを頼んだことについて、李徴はどのように考えているか。李徴の考えが書かれた形式段落の最初の五字を抜き出せ。思

答 人間としての理性を失って、正常な判断ができなくなることを。(28字)

答 本当は、ま

問 傍線部12とあるが、李徴が袁慄にこのように頼んだのはなぜか。二点に分けて、それぞれ五十文字以内で答えよ。思

答 獣として恥ずかしい姿で生きていると思われるより、人間として尊厳を保つたまま死んだと思われるから。(49字) / 自分があさましい姿で残虐な行為を繰り返していると知らせることで、妻子を苦しめたくないから。(45字)

問 傍線部13とあるが、「李徴の声」が「自嘲的な調子」に戻ったのはなぜか。それについて説明した次の文の空欄に入る適切な語句を、本文中から四十文字以内で抜き出せ。思

自分の、人間性を欠いたありさまが、軽蔑すべきものに思われたから。

問 傍線部14とあるが、李徴は「人間」をどのようなものと考えているか。四十文字以内で説明せよ。思

答 飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような(39字)

問 傍線部15が象徴するものについての説明として最も適当なものを、次から選べ。思

答 自己中心的・利己主義的な生き方を排し、他者を愛し守ることができる存在。(35字)

ア 朝の訪れを告げるその月の色は、親友袁慄と二度と会うことができないと知った李徴の後悔を表している。

イ 光を失った月のように、まもなく人の心を失って虎になりきるようになる李徴には、もう詩人としての理想も希望も残されていないことを表している。

ウ 朝日に象徴される袁慄とは違い、白い月のように存在感のない世界でしか生きていけなくなってしまう李徴を表している。

工 孤高さを象徴する断崖の虎ではなく、道の上で咆哮する虎の姿に月を重ねて、まもなく命を失うことになる李徴を表している。
才 李徴と袁修の心をつないできた月は、もう色あせてしまい、再び親しく語り合うことはないことを予兆している。

答
イ

問 傍線部16の表現上の効果として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 人間の弱さやもろさは意志の強さによって克服できるということを暗示している。
イ 人間としての生活を諦め虎としてたくましく生きていく李徴の決意を象徴している。
ウ プライドが高い人間であれば虎になることがあり得るという可能性を描いている。
エ 叢にはどのような危険生物が潜んでいるかわからないということを警告している。
オ 異類となり人間とは別の世界で生きていかねばならない李徴の悲しい運命を表している。

答
オ

問 夜が明け始めていることを示す情景描写を、本文中から三つ、それぞれ十字程度で抜き出せ。思

答 あたりの暗さが薄らいできた(13字)・暁角が哀しげに響き始めた(12字)・既に白く光を失った月(10字)

問 『山月記』の構成上の特徴の説明として最も適当なものを、次から選べ。思

ア 前半を漢文体、後半を会話体にすることで、全体的に格調高い作品に仕上げている。
イ 主人公と対照的な袁修が登場することで、虚構性の強い内容ではあるが読者に受け入れられやすくなっている。
ウ 袁修一行の旅先での経験という形式にして、非日常的な世界の出来事であることを強調している。
エ 虎になった理由を繰り返し説明することで、超自然の怪異という物語の主題がよりわかりやすなものとなっている。
オ 作品の大部分が李徴の告白で占められているため、物語が真実味のある作品に仕上がっている。

答
イ

問 『山月記』に袁修が登場することで、作品全体にどのような効果を与えているかについて、四人の高校生が意見を交流した。明らかに読み誤っているものを、次から一つ選べ。思

ア 生徒A「袁修は出世の道を進むいわばエリート官僚で、虎となって人間の世界を離れてしまった李徴とは対照的な人物として登場しているよね。つまり、袁修との対比によって、李徴が置かれた悲惨な状況がより強調される仕掛けになっているんじゃないかな。
イ 生徒B「温和な袁修の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかった」とあるように、性格面も袁修と李徴とは対照的だね。そして、温和な袁修は監察御史となり、峻峭な李徴は虎となってしまふ。つまり、性情が人の行く末を左右するという作品のテーマが、袁修と李徴の対比によって明確になる仕掛けになっていると思う。」

ウ 生徒C―「袁慘は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった」という描写があるけれど、袁慘が素直に怪異を受け入れることで、人間が虎になるという不思議な話であっても、無理なく読者を引き込むことができているんじゃないかな。

エ 生徒D―李徴の告白を読者は袁慘を介して聞くことになるよね。ということは、袁慘の視点に読者の視点も重なることになるから、李徴の心情を客観的にとらえて分析することができる仕掛けにもなっていると思う。

次の文章は、中島敦が『山月記』執筆の際に素材とした中国の伝奇小説『人虎伝』である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、一部に中略がある。

隴¹西¹李¹徵¹皇¹族¹子¹家¹於¹虢¹略¹徵¹少¹博¹学¹善¹属¹文¹弱¹冠¹從¹州¹府¹
 貢¹焉¹時¹号¹名¹士¹天¹宝¹十¹五¹載¹春¹於¹尚¹書¹右¹丞¹楊¹元¹榜¹下¹登¹進¹士¹
 第¹後¹数¹年¹調¹補¹江¹南¹尉¹徵¹性¹疎¹逸¹恃¹才¹倨¹傲¹不¹能¹屈¹跡¹卑¹僚¹嘗¹
 鬱¹鬱¹不¹樂¹每¹同¹舍¹会¹既¹酣¹顧¹謂¹其¹群¹官¹曰¹「生¹乃¹与¹君¹等¹為¹伍¹耶¹」
 其¹僚¹友¹咸¹側¹目¹之¹

及²謝²秩²則²退²歸²間²適²不²与²人²通²者²近²歲²余²後²迫²衣²食²乃²東²遊²
 吳²楚²間²以²干²郡²國²長²吏²楚²人²聞²其²聲²固²久²矣²及²至²皆²開²館²以²俟²
 之²宴²遊²極²歡²將²去²悉²厚²遺²以²實²其²囊²藥²在²吳²楚²且²歲²余²所²獲²
 饋²遺²甚²多²西²歸²虢²略²未²至²舍²於²汝²墳²逆²旅²中²忽²被²疾²発²狂²鞭²捶²
 僕²者²不²勝²其²苦²於²是²旬²余²疾²益²甚²無²何²夜²狂²走²莫²知²其²適²

従者は李徴を探すが見つからず、李徴の持ち物を持って逃げてしまった。翌年、李徴の旧友袁修が、天子の使者としての旅の途中、偶然李徴に出会う。だが、李徴は草むらから姿を現さない。李徴は、去年病気にかかり発狂して虎になった、と語る。そして袁修に、へ妻子には今日のこととは言わず、「李徴は死んだ」とだけ告げてほしい。また、妻子を経済的に助けてやってほしい」と頼み、袁修は快諾する。李徴は、続けて以下のように言う。

虎曰、「我有旧文数十篇。未行於代。雖有遺稿。當盡散落。君為
 我伝録。誠不能列文人口。闕然亦貴。伝於子孫也。」**慘**即呼僕
 命筆。隨其口書。近二十章。文甚高。理甚遠。閱而歎者。至於再三。
 虎曰、「此吾平生之業也。又安得寢而不敢傳。歟。」**既**又曰、「吾欲為詩
 一篇。蓋欲表吾外。雖異而中無所異。亦欲下以道。吾懷而**攄**。吾憤
 也。」**慘**復命吏以筆授之。

李徴は『山月記』と同じ詩「偶因狂疾」〜「但成嗔」を詠む。

無有自恨乎。虎曰、「君之才行。我知之矣。而君至此者。君平生得
 時。所遭之數。吾又不知也。噫。顔子之不。幸。冉有斯疾。尼父常深
 歎之矣。若反求其所自恨。則吾亦有之矣。不。知。此。因。此。乎。吾遇
 故人。則無所自匿也。吾常記之。於南陽郊外。嘗私一孀婦。其家
 竊知之。常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乘風縱火。一家
 數人。尽焚殺之。而去。此為恨爾。」

慘覧之。驚曰、「君之才。行。我知之矣。而君至此者。君平生得
 時。所遭之數。吾又不知也。噫。顔子之不。幸。冉有斯疾。尼父常深
 歎之矣。若反求其所自恨。則吾亦有之矣。不。知。此。因。此。乎。吾遇
 故人。則無所自匿也。吾常記之。於南陽郊外。嘗私一孀婦。其家
 竊知之。常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乘風縱火。一家
 數人。尽焚殺之。而去。此為恨爾。」

李徴は袁慘に、へ自分が虎の心に支配されて襲いかからないよう、帰り道は違う道を通ってほしいへしばらく進んだら振り返って自分の姿を見てほしいと頼む。二人は深い悲しみをいだきながら、丁寧な挨拶を交わして別れた。

震フ

慘モ 亦 大イニ 慟ナゲク 行クコト 数 里ニシテ 登リテ 嶺ミねニ 看ミレバ 之ヲ 則 虎 自ヨリ 林 中 躍 出 咆 哮 巖 谷 皆

4

後 回カヘル 自リ 南 中 乃 取リ 他 道 不 復 由 此 遣 使 持 書 及 賻 贈 之 礼 訃

於 徴 子 月 余 徴 子 自 號 略 入 京 詣 慘 求 先 人 之 柩 慘 不 得 已 具

疏 其 伝 遂 以 己 俸 均 給 徴 妻 子 免 飢 凍 焉 慘 後 官 至 兵 部 侍 郎

問 傍線部1とあるが、『山月記』では李徴が「皇族」の子孫だったという記述は出てこない。この改変により、『山月記』にどのような効果もたらされていると考えられるか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴が抱えた苦悩を一般の読者にも共有しやすいものにする効果。

イ 李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、高い地位に登りつめた袁徴との境遇の違いを曖昧にする効果。

ウ 李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴が高貴な家柄に憧れる人物であることを暗示する効果。

エ 李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴の性情が低俗なものであることを読者に印象づける効果。

オ 李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴を作者自身の境遇に近づけて物語に現実味を持たせる効果。

問 傍線部2とあるが、『山月記』では、李徴が役人を辞めた理由は何であったか。思

答 プライドが高く低い官職に甘んじられず、詩人となって詩家としての名を死後百年に遺そうと考えたこと。

問 傍線部3とあるが、『山月記』では、袁徴は感嘆しながらも「このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と感じていた。この改変により、『山月記』にどのような効果もたらされていると考えられるか。適当でないものを、次から一つ選べ。思

ア 李徴の文学的な才能が不十分であったことがほめかされ、李徴が文学者として名を成さなかったことに必然性が付与される。

イ 李徴には詩の豊かさを生む素地となる人間性が不足していたことが暗示され、李徴の変身の原因と文学者としての失敗の原因とが関連付けられる。

ウ 袁徴が李徴の詩を冷ややかな目で見ているという設定により、人間が虎になるという超自然の怪異に対して袁徴が疑念をいだきはじめたことが暗示される。

エ 『山月記』は、李徴が自分の才能を信じ切れなかったと設定しているが、袁徴からの否定的な評価が提示されることで、この李徴の自己評価の正しさが示される。

オ 「李徴は官僚として失敗した時点ですでに文学者としても一流になることは難しい」という、官僚が同時に文学者でもあった唐代における袁徴の価値観が示唆される。

答 ウ

問 傍線部4以降に袁徴の後日譚があるが、『山月記』ではこれは出てこない。この改変により、『山月記』にどのような効果もたらされていると考えられるか。説明せよ。思

答 具体的・現実的な話題ではなく、李徴の咆哮で作品が終わるようにすることで、李徴の精神的な煩悶に焦点を当て、超自然の出来事の余韻を残す効果。

問 李徴が虎になった原因や、それを語る李徴の様子についての説明として、適当なものを、次から二つ選べ。思

ア 『人虎伝』では聞き手としての袁惨の存在を意識するあまり李徴は本心を語り尽くしていないが、『山月記』では心の内を隠さずにさらけ出している。

イ 『人虎伝』では李徴は、即席の詩を詠んだ後、袁惨にうながされて、虎になった原因を語り出すのに対し、『山月記』ではうながされずに自分から語っている。

ウ 『人虎伝』では殺人という具体的な行為が虎になった原因とされるのに対し、『山月記』では臆病な自尊心・尊大な羞恥心という抽象的な心が原因とされている。

エ 『人虎伝』も『山月記』も、李徴に危害を加えようとしたり嫉妬したりする悪意ある第三者が存在し、それにより李徴が陥られて虎になるという点は共通している。

オ 『人虎伝』では罪を犯したため獣になるという因果応報的な設定がなされているが、『山月記』では文学を愛する努力家でありながら獣になるという不条理が描かれている。

答 イ・ウ

問 以下は『山月記』と『人虎伝』に関する教室での会話である。空欄Ⅰに入れるのに最も適当なものを、後から選べ。思

教師——『山月記』は中国の伝奇小説『人虎伝』を素材にして書かれています。しかし、細部を見ると、『山月記』と『人虎伝』とは異なる箇所が多くあることに気づきます。『山月記』と『人虎伝』には、どのような違いがあるかを話し合ってみましょう。

生徒A—役人を辞めた李徴が、職を求めて楚呉に赴くという記載は、『山月記』には見られない『人虎伝』独自の展開だね。

生徒B—そして、李徴は楚の国で歓待を受けている。「皆開館」とあるように、多くの人が彼を温かく迎え入れたようだ。『山月記』では、「人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた」ともあるように、李徴はできるだけ人を遠ざけていたから、『人虎伝』における楚での李徴の様子は、『山月記』とは大きく違うように思うのだけれど、どうだろう？

生徒C—たしかに、そうだね。『人虎伝』では「僚友」「郡国長吏」「僕者」といった人たちも登場していて、『人虎伝』の李徴は人と交流することをそれほど避けてはいないようだね。

教師——よいところに気づきましたね。たしかに『人虎伝』では、李徴から「僚友」に言葉をかけたり、「僕者」を鞭打ったりと、李徴と関わる人物が登場することで、良くも悪くも他者との交流が確認できます。一方、『山月記』の冒頭では、李徴以外の人物は登場せず、李徴と周囲の断絶が強調され、李徴が自己分析で語った「世と離れ、人と遠ざか」ったということがここでも示されています。こうした変化にはⅠがあるといえますね。

ア 李徴が虎になるという超自然の怪異を讀者に受け入れやすくする効果

イ 胸中では人との交流を望んでいたという李徴の本心をほめかす効果

ウ 李徴の心に育つ「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」に説得性を持たせる効果

エ 「最も親しい友」であったという袁倅との交友に疑念を生じさせる効果
オ 虎にさえならなければ李徴が詩家として名を遺す人物であったことを暗示する効果

答
ウ